同志社人物誌　(59)

秦　孝治郎

坂本武人

古里に似し思い出や春椿

一九五四（昭和二十九）年から七二（四十七）年まで十八年余にわたり学校法人同志社の理事長として奉仕された秦孝治郎先生は、私にとって遠く離れた古里を想い起こすと同じ思いをいまなお抱かせる存在である。おそらく先生を知る多くの方も、私と同様な思いを持たれるのではあるまいか。

それほど良く知っている訳ではない。でも、想い出すたびに暖いものが、胸の底から湧き上がってくる。大らかである。去るものを追わず来るものを拒まず、悠揚迫らないものがある。それでいて決して冷たくない。

秦先生は、また、榎の大木をイメージさせる存在でもあった。しかも、それは、いつも、明日に向かって希望を持たせてくれる若葉に包まれた春の榎の姿を彷彿させてくれるもの。

理事長として入学式、卒業式に臨まれる時、教職員組合との団交のため席に着く時、また、多少遅れて同志社教会の日曜礼拝に出席される時にも、常に悠然と大樹の趣きを醸すと同時に、春を告げる若葉の優しさを回りの人びとに感じさせずには措かなかった。

秦先生は、また、苦労人であり、陰徳の人であった。先生は家業の衰運のため、年若くして実業に就く必要に迫られ「京都の逓信局の伝習所を了えて、出身地の滋賀県水口の郵便局で働いていた。が、志を立てて」同志社普通学校に入学し、一九一二（明治四十五）年に二十二歳で卒業している。同志社在学中も「学費自給のため京都教会の書記を担任していた。」しかし、クラスの世話をよくみるので普通科四年になった時、副組長に、大学に入ると予科から卒業まで組長としてクラスの面倒をみてきた。（級友平田、足立両氏の偲び草）

このような秦先生に、私が直接お目にかかったのは、私が大学三回生の夏、一九五四（昭和二十九）年、万国基督教共励会の世界集会が軽井沢の星野温泉で開催された時であった。先生は、一九二一（大正十）年から日本連合基督教共励会の会長をなされており、一九五一（昭和二十六）年からは万国連合基督教共励会の副会頭という要職にあった。この集会にも、副会頭としてまた集会のガバナーとして出席されていた。私もメンバーの一人として出席したのであるが、貧乏学生であ

り、秦先生の学生時代同様教会の書記（同志社教会）をしていた私には会費は免除されていた。

また、この集会に出席する前、私は何かの事故で折れた眼鏡のつるをセロテープか何かでぐるぐると巻いていた。先生は、そのことについて直接何も触れられなかったが、集会が終わったあと、当時本部職員（専務理事）であった奥村龍三氏が、私に京都に帰ったなら、三条の眼鏡屋に行って「同志社から来た」といえば安く買えるからと耳打ちしてくれた。京都に帰り、言われた眼鏡屋に行ったところ、丁寧に検眼し新しい眼鏡を調整してくれた。代金は定価の三分の一以下であったと記憶している。何も知らない私は、こんなに安くしてもらえる「同志社という名前」に感心していた。

数年後、同じ店に行ったが、なじみの客として迎えてくれたが値引きはなかった。いまにして思えば、あの時共励会の参加費や眼鏡代の一部は、秦先生が払って下さったとも考えられる。

奉仕こそわが理想なり夏帽子

秦先生が、新島先生の建てられ育てられた母校同志社をこよなく愛されたことは人後に落ちない。

「秦さんは何といっても愛校家であり、愛校の点で徳富先生に似たところがあった。いわば、徳富精神の継承者であった」と元同志社大学長田畑忍先生は書かれている。また、ご子息克彦氏も「同志社に専念するようになって父は、それ以前の父と大きく変わった。以前の父は、気が短く、われわれはよく叱られた。いらいらしていたことも多いカミナりおやじであった。しかし、京都に移ってからは、目に見えておだやかになった。そしていつでも張り切っていた。同志社は、父の生きがいそのものであったようにみえた」と述懐されている。

秦先生は、戦後、急速に膨脹し続ける同志社の財政危機を救済するエースピッチャーとして、一九五四（昭和二十九）年八月、学校法人同志社の理事長となり、その年五月、理事会において窮余の策として決定していた一億二千万円の学債公募を年末までに完了させた。その後十八年間曲折を経ながらも学校法人同志社の財政基盤の確立を図り、田辺校地をはじめとするキャンパスの拡大、建物の増築、教職員の給与の向上とその安定化を促がす働きに渾身の力を振われた。

同志社を愛された秦先生は、経営面の充実だけでなく、新島先生の「社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事」という遺言を身を以て実践した一人であった。すなわち、戦後の膨脹期における財政画の危機を乗り越え見事な発展を遂げた同志社も、ベビーブーム世代を大学に迎え入れると期を同じくして全国的に吹き荒れはじめた〝大学紛争〟の嵐に巻き込まれた。そのため、学園に精神的な荒廃がみなぎるようになった。

秦先生も、大学における経営の責任者として、しばしば、学生とのいわゆる〝大衆団交〟の席に着くことを強要された。先生は、老軀をいとわずこれに臨み、学生の言い分に耳を傾けた。

このような姿勢は「われらの先輩、山室軍平氏はこういっている。『いわゆる同志社スピリットは神を愛し、人を愛し、その為に〝凡ての者の僕〟となって奉仕する基督教精神の他にないと思います』と。学園の今後の在り方については単に数字の膨脹のみを以て

計ることはできない。新島先生の期待せらるるものは、九十九匹の羊よりも一匹の迷羊である。九十九匹と共に一匹の羊を更生せしむるのが、われわれの責務であろう」（秦孝治郎『年輪の足跡』）という「奉仕」と「愛」の精神に根差していたといえる。

秦先生は〝九十九匹〟の羊であるいわゆるノンポリ学生よりも〝一匹〟迷える羊の赤ヘル学生の心に灯をともすことを求められたのである。

「あの学生紛争のはげしい時期にも、学生には親愛の情を持ち続けていた。最後の学生とのはげしい団交のあと、ドクターストップで家に帰った父に電話した時にも、学生がコートを着せてくれて嬉しかったということばかり言っていた」とのことであり、聖書に誌されている「放蕩息子に対する父親」の心境がにじみ出ている。このことが遺品の手帳の中に、次の一句として凝結されていた。

赤ヘルの学生己がコートぬぎ
われに着せたり激論の中

同志社を愛し、学生との心の交りに生きがいを見出していた先生がその晩年、理事長の職に止まるべきか否か思い悩む時があり、「俺が辞めることが、本当はいいのではないか」と洩らすと共に、その心中を次の一句にまとめていたという。

わが母校、護らん為めに
老の身をベッドに伏して
只祈るのみ

秦先生の後半生は文字通り、同志社を愛し学生を愛した生涯であった。

秦　孝治郎 元理事長

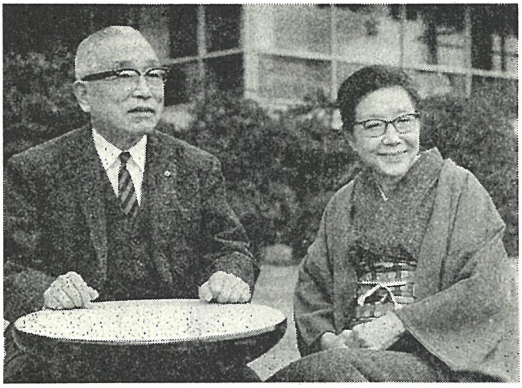
赤茶けしノートを照らす市の月

秦先生は、同志社理事長という激職の傍ら、人知れず続けてきたライフワークがあった。「露店」の研究である。

先生は、一九一六（大正五）年、同志社大学経済学科を卒業し、久原鉱業に就職したのであるが、一九二一（大正十）年から一九二三（大正十二）年まで「しばしば高知を訪れ全く土佐人になったような気分」になり、「高知（土佐）の日曜市」のとりことなった。そして、忙しい職務の間を縫って資料を蒐集し、その研究を重ねた。そして、その成果を「郷土の経済『日曜市』」と題し、大正十三年五月から六月にかけて地元の土陽新聞に前後十三回にわたって連載した。それぞれの回の見出しを列記すると一、市といふ言、二、外国の例、三、我国に於ける市の沿革、四、保護政策より生まれたる市の成立、五、玄人と素人、市の内規、六、市の開許区域と慣習、七、自由なる市の組織、八、開店数と販売品、九、市の商人の戸籍調、十、価格と売上高と、十一、市と公設市場との関係、十二、マーケットの誕生、十三、その発展策となっている。

秦先生は、露店について次のようなユニークな見方をしている。

「ただ、何気なく雑踏にまぎれて歩きながらも、必ず目を引かれる魅力を、並べられている商品に感じるのが、そもそも露店をひや



秦　孝治郎先生御夫妻

かす面白い点である。同時に、それを買う姿にも一種の深い人間性がただよい、独特の味わいが存在する」と。

秦先生にとって露店は、機械による大量生産体制の下で作り出される莫大な物に支配され、画一的になり人間性を剝奪されようとしている現代人に、自分の目で、自分のハートで生きる人間らしい生き方を思い起こさせてくれるものであったといえる。

このような視点に立って露店に接し、そこにある人間が人間として支え合って生きる原型を探ろうとしたといえる。それゆえにこそ五十年余の長きにわたり文字通り「忙中閑」を求めて研究を継続できたといえる。

令息克彦氏は、その研究を通じて「父は学問への憧憬をたしかめ続けていたのではなかったか」と述べている。たしかにそのようにも理解される。しかし、私には、その研究は単なる学問的憧憬以上のもの、すなわち、秦先生が一人の人間として現実のカオスの中で、真に生きることの意味を探る場として露店を位置づけ、その研究を生きることの喜びそのものにまで昇華させていたと思われるのである。

このようにして秦先生が五十余年の長きにわたって書き連ねてきた露店研究の草稿は一千余枚に達していた。これは先生がなくなられたあと、ご家族によって遺品を整理される中で発見された。そして一九七三（昭和四十八）年、善恵未亡人によって私に、その整理出版が託された。怠け者の私は四年もの歳月を費し、一九七七（昭和五十二）年十一月、ようやく『露店市、縁日市』と題し、白川書院より上梓の運びとなった。編集の任に当たった私が言うのは変であるが、あるいは、内容を知っているから言うのであるが、なかなかの好著であり朝日新聞の書評欄でも取り上げられた。

池深し鯉悠然と凍らざる

「古き日の同志社の良心の中に秦理事長の名を書きつらねたいとおもう」と元文学部教授里井陸郎氏は言う。

秦先生は、百年の星霜を重ねる中で失いかけた同志社の良心を、二百年の歴史の中に引き継ぎ、刻み込むために、神が遣わされた人と見ることができる。物欲と我執のみちみちた二十世紀後半の社会にあって、同志社も、その圏外にあってパラダイスを形成するという訳にはいかなかった。このような時代において単に伝統に依拠したり、時流に諂う生き方を強調すれば、空中分解はまぬがれなかった。

秦先生は、「良心を手腕に」、右に傾かず左に偏らず同志社を一つの同志社として二世紀を迎えるために道を開かれた。しかし、輝やかしい百年の歴史を飾る席に着くことなく一

九七二（昭和四十七）年十一月、突如として神に召された。

「偲び草」により、人々の心に映った秦先生の面影を探ろう。

「新島先生の遺（のこ）した、形に見えぬあるものが秦さんの古武士然たる風貌の中ににじみでていた」（里井陸郎元教授）

「秦さんとくると、私は数々の思い出がある。しかし何よりもその聞こうとする態度とまじめさとニコニコ顔は忘れることができない」（オーテス・ケーリ教授）

「教会でも、各種の集会で人々の、特に若い人の話にホウホウと相づちを打って聞いておられた。きき上手の先生であった」（仁井国雄元女子中高・国際高等学校長）

大学時代「身体は頑健で大身で、いつも意気軒昂だった。もともと性格は中庸の人だった」級長として「硬軟適宜の舵取に苦心した」（足立宇三郎氏）

普通学校時代「親分肌で、議論はするが、敵を作らず、いつかまとめてしまう人だった」（平田甫氏）

「自らには厳しく周囲の人びとに優しく、ちょうど新島先生が初めて勝海舟翁を訪れられた時、翁が先生へ揮毫して与えられた愛誦の『六然』の句、『自処毅然、処人靄然、無事澄然、有事嶄然、得意冷然、失意泰然』ということば通り、靄然としていわゆる大人の風格を備えておられた」（住谷悦治元総長）

神の豊かな恩寵と新島先生の熱い祈りによって建てられた深い池同志社が大きな鯉、秦先生をより大きく育てられた。そして、その大きをもってこの池を外圧ではなく内部から崩壊する危機をはらんだ厳しい冬の時代にも凍て付かせないできた。

（女子大学教授）

（付記、秦孝治郎先生について書くのに、より適任の方があると承知しながら編集部からの依頼に、直ちに応じてしまった軽率を、秦先生をよくご存知の方にお詫びすると共に、先生についての伝記を少くとも善恵夫人のお元気な間に書くことを新に提案し、そのための資料ならびに衆知を集めることを校友、同窓ならびに教職員の方々にこの機会にお願いします。坂本）

同志社談叢 第六号

論文

磯貝雲峰の生涯と文学……河野仁昭

『荒村遺稿』未所収松岡荒村
同志社時代の作品……天野　茂

星野徳治の日記とその時代……相川尚武

棚あげされた同志社憲法……和田洋一

同志社と香里学園の合併問題……喜多正明
―香里所有の資料を中心にみた―

「新島襄旧邸」保管の石鏃をめぐって……鈴木重治
―石器時代の環境と文化―

資料

同志社常務委員会記録
自・明治三十七年四月廿七日
至・明治四十四年七月十日

『同志社談叢』既刊総目録

新島襄に関する文献ノート・
その五……河野仁昭

（頒価一、〇〇〇円）

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
（電〇七五―二五一―三〇三七～八）